

## 審査結果の要旨

報告番号	乙 第 3067 号	氏名	恒吉 信吾
審査担当者	主査	行原 真一	(印)
	副主査	藤本 公則	(印)
	副主査	西小森 隆太	(印)
主論文題目： Poor Asthma Control in Schoolchildren May Lead to Lower Lung Function Trajectory from Childhood to Early Adulthood: A Japanese Cohort Study (学童期の喘息のコントロール不良は小児期から成人期への肺機能低下を引き起こす可能性がある)			

### 審査結果の要旨 (意見)

主論文の内容は長期間にわたる貴重なコホート研究に基づいており、既に Journal of Asthma and Allergy にアクセプトされている。吸入ステロイドの使用が一般化される前の時代に行われた研究であることや調査対象者数が限られていることなどによる研究の限界は存在するが、集談会での発表後の質疑応答にも適切に対応されており、申請者の知識・理解は十分と判断された。よって、学位(博士(医学))を授与可能と考える。

### 論文要旨

学童期喘息は成人期肺機能障害の危険因子だが、小児喘息のコントロールと肺機能の成長との相関は不明である。大牟田市大気汚染関連健康被害者コホート研究に登録された小児喘息 505 人を対象とした。6・11 歳及び 12・17 歳の女兒と男児の特徴を、喘息コントロール不良群(不良群)とコントロール良好群(良好群)で比較した。505 人のうち 214 人(42.4%)が不良群であった。不良群では予測 1 秒量が 6・11 歳/12・17 歳の女兒(80.2%/80.0%)と男児(79.2%/81.1%)と低値であり、良好群では 6・11 歳/12・17 歳の女兒(87.9%/88.1%)と男児(87.3%/87.8%)と高値であった。肺機能の発達に群間差は認めなかった。18・20 歳の若年成人で閉塞性換気障害を示す割合は不良群の女兒(24.6%,  $P = 0.0026$ )及び男児(24.4%,  $P < 0.0001$ )で、良好群の女兒(1.4%)及び男児(8.1%)と比較し有意に高かった。小児期喘息のコントロール不良が学童期と若年成人での肺機能障害に結びつくことが明らかになり、小児における早期喘息コントロールの重要性が示唆された。